
マシュマロとオレ。

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マシユマロとオレ。

【Nコード】

N7243E

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

同じ小学校に通っていたマシユマロは、よくイジメられるヤツだった。赤くなるだけで日焼けしたことがない白い肌とぷよぷよした体つき、それにとんでもねえ猫背で何をするにしても優柔不断。マシユマロってあだ名の原因は肌の白さとぷよぷよさだった。中学校が違ったから、オレはマシユマロのことなんて忘れてたんだ。遊びに出た夜の街で、カツアゲにあっているとこに出くわすまでは・・・

マシユマロとオレ。

「それで？」

ビルの壁でタバコをもみ消しながら、オレは言った。
最近の好みはマルボロの赤、ライトだ。

「……それで、って？」

弱弱しく震える声にこんなにもイラつく理由が分からなくてます
ますイラつく。

少しうつむいたその顔も、猫背も、立ってる位置も、なにもかも
が気に入らねえ。

「ごまかすんじゃないよ」

問答無用でぶん殴りにいきそーな自分に気づいて、指先から少し
力を抜く。

あっけなく、マルボロの残骸がむきだしのコンクリートに落ちた。
そのかすかな音さえ致命的な失敗のように耳に響いて、オレはと
んでもなく怯えてる自分を知った。

そうだ、ひどく怯えてるんだ、と改めて思う。

盗んだバイクで爆走して事故った時だって、ここまで怯えたりな
んかしなかったオレが。

よりによって眼の前のバカのせいだ。

「懇切丁寧に聞いてやろうか？ お前、ここで何しようとしてるんだ、って」

そう言ったオレのほうが、追いつめられてる気がした。

このバカ・・・マシユマロは、むかしっからよくイジメられていた。

あのなまっしろい肌とぷよぷよした体つき、猫背に煮えきらねえ態度。

それが、イジメとマシユマロってあだ名の原因だった。

気まぐれにかばってたのも小学校までだった。

マシユマロは中学受験して遠くの私立に行き、オレは近くの公立に進んだからだ。

そこで、中学を卒業するころには、オレはマシユマロのことなんか忘れてた。

遊びに出た夜の街で、カツアゲにあつてるところに出くわすまでは。

ぶっちゃけ、一目でマシユマロだと分かった。

ぷよぷよしてた体はふくよかってレベルに収まってたものの、なまっしろい肌と猫背がそのまんまだったからだ。

カツアゲしてたのは、県内でも有数の進学校の制服を来た奴らだった。

マシユマロもおなじ制服だったからクラスメートだったのかもしれないけど、そんなことどうでもよかった。

その日のオレは、ひどくむしゃくしゃしてて何かにあたりたくて仕方がなかったんだ。

喫煙だか飲酒だか、それとも無免許運転だかがバレて親父に殴られたからじゃないかと思う。

正確な記憶なんて、残ってねーけど。

とにかくカツアゲしてる側の奴らがあんまりウザかったから、奴らを取りあげて騒いでたマシユマロのケータイを奪い返して、そのときに投げかけられた脅迫めいた言葉ぜんぶ録音して、そんでマシユマロの手をひっぱって逃げたのは確かだ。

その足で、一番近い警察署の開きっぱなしの扉から、そのケータイ投げ込んだのはまあ、言ってみれば単なるガキの思いつきだった。難しい顔して机に向かってた警官の頭に

『イジメがつらいので自殺します。このケータイに録音した会話が証拠です』

って書いた手紙つきのケータイが直撃したとこまで見届けて、とりあえずすらかって。

家に帰る気はもちろんしなかったから、塾をさぼることになったマシユマロと適当に遊んで公園で野宿して、そんで朝がきたから別れた。

その間、警察から学校とマシユマロの家に電話が行って大問題になってたらしい。

後で話を聞いたオレはむしろ職務に忠実な警官に感心したけど、マシユマロはそれだけじゃすまなかったそーだ。内密に事情聴取を受けて、調書取られて大変だったらしい。

でもまあ、録音にカツアゲしてた奴らの名前まできっちり入ってたってあたりはいっそ笑い話だ。

結果的に、金額が大きすぎて何人かが鑑別所送り。

いいとこの奴らが行く学校だったから停学やら退学やら一時期大変だった代わりに報復に来るほど危ないヤツはいなかったらしく、マシユマロに手を出すやつも少しは減ったとかで。

オレはそんなこと忘れて、適当に夜遊びをくりかえしてたんだが。ある日マシユマロにつかまって、散々ありがとうだとか命の恩人だとか言われて、つきまとわれてるうちにガキの頃みたいにツルムようになった。

つても、マシユマロは酒も飲めなきやタバコも吸えねえヤツで。無理に飲ませんのもめんどくさかったから、ゲーセン行ったりてきとーな話したりするだけの付き合いだったけど。なんとなく、オレはその時間が嫌いじゃなかった。

走馬灯のように思い浮かぶ記憶に舌打ちする。
まったく、縁起でもねえ。

「なあ、ここで何しようとしてたんだよ、マシユマロ」

もう一度、同じ言葉をくりかえして、オレはうつむいたままのマシユマロを見つめた。

「このオレにありえねえ電話して、他人サマのマンションの屋上に来て、何してやがんだテメェは」

いつものように凄むことはできなかった。

何が、今までありがとう、だ。

何が、迷惑かけてごめんね、だ。

あげく、やっぱり僕はダメなんだ、と来た。

でめえ、なめてんのか。

いっそ殴ってやるからこっち来やがれ、バカめ。

「……して」

「ああ？ 聞こえねえよ。もっとでけえ声で喋れ」

ようやく返ってきた返事にほっとして、オレは思わず怒鳴っていた。

聞こえねえのは本当だった。膝が震える音が邪魔だ。

こちらら、12の頃から筋金入りの喫煙者だ。

肺なんかとつくの昔に真っ黒だ。

そのオレに、どんだけ走らせやがった。

ほんと、信じらんねえよバカだよお前。

続けて怒鳴ってやりたいのをなんとかこらえる。

自分がここまで我慢強いなんざ、はじめて知った。

「……どうして！ どうして、こんなところまで君がくるんだ」

マジ殴る。

そのツラ、あとでぜってえ殴ってやる。

ついでに腹も背中もとにかくタコ殴りだ。

顔は平手にしてやるから盛大にかかわれやがれ。

心の中で勝手に決めて、オレは当たり前前すぎる理由を叫んだ。

「バカを連れ戻しに来たに決まってるじゃねえか！ このバカ！」

叫ぶそばから、マルボロの残骸が風に転がっていくのが視界に映る。どうしても止まらねえ足の震えが忌々しくて、壁に拳を叩きつけた。

痛みに、少し恐怖が和らぐ。

ああ、そうだ。オレは怯えてる。

さっきのタバコみてえに、簡単に落っこちまいそんな場所に立ってやがるこのバカに。

「お前いねえとオレどうすんのよ!？」

こっそり酒飲んでも楽しさ半減だろ!？」

支離滅裂なことやってんのは自分でも分かった。

でも、だってそーじゃねえか。

いまどき、ビールの一缶あけようとしたくらいで青ざめて必死で止めやがる高校生なんてほかにいねだろ？

ついでにバドワイザーも知らねえときた。

歴代総理大臣もアメリカ大統領も全員言えるってのに、そういうの知らねえんだぜ？

ありえねえだろ。

そんなクソまじめでおもしれえヤツ、マシユマロぐらいしかいねえんだ。

自分に言い聞かせるように胸の中で呟きながら、一歩だけ近づく。怯えたように後ずさりしたマシユマロが、身長の半分くれえの柵にぶつかって止まった。

一瞬、柵がアメ細工みてえに崩れた気がして、オレはマジで叫んだ。

「それともアレか？ 遠大な嫌がらせか？

お前の葬式でオレを泣かせて笑いものしようとも思ったか？」

「…んなこと!」

ああ、ひでえこと言ってるよ。

こういう場合、興奮させねえように説得すんのが定石じゃねえ？
思いながら、距離を詰める。

ようやく顔を上げたマシユマロは、顔中ぐしゃぐしゃだった。

「お前にその気がなくてもオレあ泣くんだよ！！」

何も気づいてやれなかったって一ヶ月は落ち込んで酒飲んで暴れてそのままバイク乗って事故って後追ってやるよ！！！！」

思いつくままの言葉をぜんぶ投げかけて、動きが止まったすきに
オレはマシユマロに飛びついた。

脚と手を封じて、とりあえず動けねえように上から押さえつけて。
目をそらそうとしやがったバカのあごを、右手で掴んだ。

「だから、生きてろよ。」

言う予定のなかった言葉が、勝手に口をついて出る。

ポタ、と

マシユマロの頬に雫が落ちて、雨でも降ってきたのかとオレは一瞬空を見上げた。

星と月が瞬くだけのそこに、雨雲はなく。

オレは、よりによって自分が泣いているというトンでもない事実
を認めざるをえない状況に愕然として、次の一瞬で腹を括った。

鑑別所に入れられた時だって、泣かなかったオレが。

このなまっちょろいバカのせいで泣けるということに、いつそ笑え
そうな気分だった。

こうなったらもう大盤振る舞いだ、と思う。

「とにかく死ぬな」

言った瞬間に、マシユマロが泣いた。

そりやもうワンワン大泣きしやがって、目茶苦茶にぶん殴ってやろうと思ってたのに、一発も入れられなかった。

そういうところがマシユマロのマシユマロたるゆえんだろう。

考えたら体の力が抜けて、オレはマシユマロの横にゴロリと寝転がった。

野郎が泣くのを押さえつけて眺める趣味はねえし、今ごろ回ってきた酔いにあらがうだけの力はもうない。

意味不明な電話に飲んでたバドワイザー放り出してバイク乗ってここまできて、それで階段一気に駆け上って・・・。

振り返った今日の夕方からこっちの記憶は、何の青春映画だと突っ込みたくなるくらいには、馬鹿らしかった。

「……ごめ」

しゃっくりをあげながら呟いたマシユマロに、オレはにっこり笑いかけて。

そんで一発殴っておいた。

「オセエ」

マシユマロとオレ。(後書き)

はじめまして。もしくは、お久しぶりです。

水音灯です。

あなたがそこに居てくださることが嬉しいです。

この作品を読んでくださって、ありがとうございます。

ご感想・ご批評、誤字・脱字のご指摘などいただけると嬉しいです。
どうぞよろしくお願いします。

なお、この作品は未成年飲酒、飲酒運転など、法を侵害する行為を
奨励するものではありません。

試験前

「いくやまいまい、おやいかさかさか……」

やおてはたかやき、と続けそうになったオレは、コンクリートから背中を持ち上げて、マシユマロの方に眉をひそめてやった。

近くでパンくずをついばんでたカラスが飛び退くくれえのしかめっ面。

だってのに、あさっての方向に目をさまよわせてるマシユマロの目には映らなかったらしい。

意味不明の呪文は止まらなかった。

「…ひはこひあよ、こことこ……」

エンドレスで続くそれは、最近マイブームになったスーフアミのセーブ用のメモに良く似ている。

30文字くらいあるひらがなを打ち込むあれだ。

「ば」と「ば」と「は」を間違えて入力しただけで二度とコンテイニユーできねえ、いやがらせみてえなやつ。最終ステージでセーブした方がいいがコンテイニユーできなかった一昨日を思い出して、オレはためいきをついた。

あれもなかなか嫌がらせだったが、目の前のコイツはもっと嫌がらせだ。

なにしろ、1週間くれえ前からずっと、このワケのわかんねえ呪文がオレのBGMなのだ。

もうすぐ中間だとかで、覚えなおしたとか言ってるヤツのせいで。なんかイライラすんのは、意味不明すぎるからなんじゃねえかと

思う。

ってーか、意味不明なのはコイツの行動だ。

「なあ」

「……でやすだにかた……うん、何？ ……ひがしでやすだに」

「お前、何でこんなところにいんの？」

「かたあし……え？」

ぱったりと呪文が止んで、マシユマロの視線が戻ってくる。

「ここ、なんか悪い噂でもあんの？」

きよとん、と首を傾げられて、ため息が出た。

お前マジで高校生か、と問いただしたくなる答えだった。

「場所じゃねえよ、お前の行動の理由を聞いてんだ」

「試験勉強してる」

即答。

あいかわらず肥満気味な顔は、毎日のように陽をあびているにもかかわらず、白い。

その白さに、気が抜けた。

「勉強、なあ」

「とにかく歴代首相を全員暗記してこいって……」

しゅしょー、って何だっけ。主将？ 柔道部とか？

「おまえのがっこ、わっけわかんねえな」

いくやまいまいって、どんな名前だよ、というつつこみは入れないことにして寝転がる。

「う・・・うるさい？」

「いちいち聞くなよ。嫌ならこねえだろ、真夏に人んちの屋上とか」

言い放って目を閉じる。しばらく何も言わずにいたら、またあの呪文。マシユマロは案外図太い。

柔道部のしゅしょーを全員覚えたからって、何なんだ。

こっちは、道交法覚えなきゃ原付乗れねえんだっつーの。

まったく、イラつく話だ。

大事なことは覚えらんねえのに、何の役にもたたねえことは忘れらんねえなんて。

家のカギだって置いた瞬間に失くすくれえ、昨日の晩メシも思いだせねえくれえ、忘れっぽいオレが。

いったい何の呪文なんだか良くわかんねえそれを、覚えちゃまっている。

あの忌々しい道交法ですらなくて！

「いくやまいまい・・・あれ？ 順番以外まだ覚えてなかった！」

唐突にあがった叫び声の意味はよく分からなかった。

もしかして、いくやまいまい、なんて人物はいないのかもしれない。い。

マシユマロはたいていそうだ。しっかりしているようで、どこか抜けてる。

「いとうひろふみ、くろだ・・・きよたか？、やまがた・・・やまがた、ありとも・・・」

蒼白になった顔が目には浮かぶような声が、のろのろと続く。

中間、明日からだっけ？

バックで、と声をかけてやろうと思った瞬間、気づいた。

・・・原付の試験、明日じゃね？

試験前（後書き）

はじめまして、もしくはこんにちは。

水音灯あらため、篠原ひなたと申します。

この物語を読んでくださってありがとうございます。
楽しい時間を過ごしていただければ、さいわいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7243e/>

マシュマロとオレ。

2010年10月12日14時57分発行